# 《日本文学Ａ　日本の古典文学　課題用シート》第十二回

学籍番号：G484282024 氏名：岩﨑莉乃愛

①項目二「浮舟の出家」内「浮舟、大尼君のもとで我が身を回顧」（レジュメ２㌻）を読み、浮舟の、匂宮・薫それぞれに対する思いについて、表の形式に従ってまとめましょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 今後の希望など | 振り返って気づいたこと |  |
| （記述なし） | 匂宮と関わったせいで  〔（小野を）さすらう　　　　　　　　　〕ことになってしまったのだ。  どうして彼を〔愛しい　　　　　　　　　〕と思ってしまったのだろうかと、  〔うんざり　　　　　　　　　　〕た気分になった。 | 匂宮 |
| 自分が〔こうして（生きて）いる〕と聞かれたら誰より恥ずかしい。遠くからでも〔薫を見たい　〕と思うが、  〔よくない心だ、そう思うまい　〕  と考え直し、気持ちを抑えている。 | 愛情は〔　薄い　　　　　　　　　〕けれども、穏やかで、匂宮と比べると格段に〔　優れている　　〕と気づいた。 | 薫 |

③項目三「『源氏物語』の大尾・夢浮橋巻」内「『源氏物語』の大尾」Ⓐ（５㌻）、同「☆浮舟の本心は？」（６㌻）、および補助資料一「薫、再会前に浮舟に疑いを持つ」（１０㌻）を読み、薫と浮舟とのすれ違いについて、表の形式に従ってまとめましょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 後 | 前 |  |
| Ⓐ（５㌻）  〔別の男〕が、小野に浮舟を  〔隠し置いている　〕せいで自分と会おうとしないのではないか。 | 補助資料一（１１㌻）  もし〔男を新たに持っている　　　〕という事実を聞きつけたら気分も悪かろう。 | 薫の邪推 |
| ㋩俗世で〔普通の女〕として過ごさずに済むこととなり、安心で嬉しいと思っている。 | ㋑〔色恋の方面　〕をきっぱり断ち切ろう。  ㋺中将に〔男女関係〕を諦めさせるため〔尼（姿）〕になりたい。 | 浮舟の本心（６㌻） |

③『源氏物語』手習巻・夢浮橋巻、『山路の露』の該当箇所を読んで、Ⓐ・Ⓑのいずれか一つ以上について、あなたの考察および感想を書いてください。

選択した課題番号〔　　A　　〕

『源氏物語』の終盤、「手習」巻と「夢浮橋」巻では、**薫と浮舟の関係が明確に和解や再会を果たすことなく幕を閉じる**。この構成は意図的であり、物語全体のテーマと深く関わっていると考えられる。

まず、「手習」における浮舟は、俗世の恋愛や人間関係に疲れ、**「色恋の方面をきっぱり断ち切ろう」と決意する**。そして、「男女関係を諦めさせるために尼になりたい」と考える。浮舟の本心が語られ、俗世を離れる姿が描かれる。

一方で薫は、浮舟の失踪後も彼女への執着を捨てられず、「別の男が浮舟を隠し置いているせいで自分と会おうとしないのでは」と邪推し、さらには「男を新たに持っているのでは」と疑うなど、彼の独占欲や猜疑心が浮き彫りになる。

このような「すれ違い」や「分かり合えなさ」は、恋愛の成熟や成就ではなく、**人と人との根源的な孤独を**描く意図の表れと捉えられる。浮舟が「普通の女」として生きず、仏道に入っていくことを「安心で嬉しい」と捉えるのも、彼女が「女」として薫や匂宮に対等に扱われることなく、ただの所有物のように扱われてきた結果の選択だと言える。

最終巻「夢浮橋」においても、二人の関係が解決されることなく幕を閉じるのは、「物語が未完成なのではなく、意図的な終焉」と捉えるべきだろう。つまり、作者は、**恋愛や執着、名誉、階級といった世俗の価値観から脱却し、心の平安を求める浮舟の姿に一種の救済や答えを見出していた**のではないか。

このように、『源氏物語』の終末部では、「恋愛の完成」ではなく「個人の覚醒と解脱」を描く方向に物語の軸が移っており、浮舟が選んだ仏道の道と、それを理解できず独り残される薫の姿は、**人間存在のあり方そのものを問いかけている**とも言えるだろう。

☆右に書ききれなかったこと、課題Ｂの調査報告（途中でも可）、質問、感想などを、自由にお書きください。